



技術者編

西暦1872年～1882年
圭介40歳～50歳

日本の動き

- 1872年 義務教育の開始
- 1873年 地租改正、徴兵制の開始
- 1874年 江華島事件
- 1875年 廃刀令
- 1877年 西南戦争

圭介の動き

- 1872年 海外へ産業視察に行く
- 1873年 借金して視察を続ける
- 1874年 帰国し「山油編」等を記す
- 1875年 タイへ公式訪問する
- 1882年 工部大学校長になる

偉人の言葉・大鳥圭介評

福沢諭吉: 戊辰戦争では負けたのに優秀さが認められ出世して、偉大な先輩です。



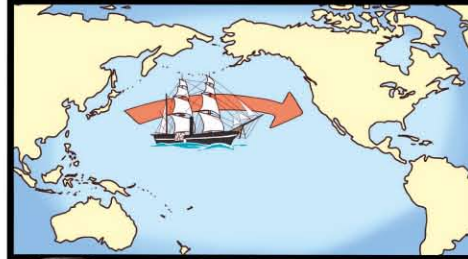
福沢は圭介の適塾の後輩にあたりますが、一緒には学んではいません。しかし明治時代になってからはお互いを認め合い、親交を深めていきました。

西郷隆盛: 圭介どんほど優れた指揮官はおらん。あの人とは戦いたくないでござす。



西郷は圭介が書いた本から兵法を学んでいました。また、西南戦争が始まった時には、「もし圭介が軍を率いてきてはわれらに勝ち目は無い」と言っています。

世界へ



圭介は、後の総理大臣・黒田清隆のおかげで釈放されます。そしてすぐれた語学力を必要とされ、釈放後すぐに「開拓使」として、欧米の産業視察を命じられます。

圭介は石油・石炭・鉄鋼業、家具、ゴム、ウイスキー、にかわ、木酢液、等々の様々な産業を単身で視察して回りました。欧米人は「言葉もわからない日本人が見たり、聞いたりしても何も分からないだろう」と事細かに教えてくれました。

すでに英語を習得し、蘭語でもたくさん洋書を読んでいた圭介は、彼らの説明を全て理解していました。また、視察中はずっとメモを取り続け、寝る間も惜しんで先進国の技術を学びました。

ロンドンの大学で講義を受けるなど、勉強していましたが、政府から帰国を命じられ、滞在費用も無くなりました。しかし、圭介は「日本にはもっと先進国の技術が必要だ」と思い、自ら借金をして滞在を続けました。こうして多くの技術を日本に持ち帰りました。

何故、黒田清隆は圭介の釈放に力を尽くしたのでしょうか?

黒田清隆は圭介の教え子であり、圭介の能力と人柄に深い信用があったからです。欧米諸国より発展が遅かった日本が成長するためには、外国に行って技術を学べる人材が必要でした。圭介は英語・フランス語・オランダ語が話せるだけでなく、科学技術についての知識も深く、まさにうってつけの人物だったのです。そのため黒田は「もし、よそに取られたら手足を引き抜かれるのと同じで非常に困る」と述べています。